

企画・制作 読売新聞社広告局 広告

進む医療 高まる治療効果



京都大学大学院 医学研究科 放射線腫瘍学・画像応用治療学 教授

リモート参加



医療法人社団裕和会 長尾クリニック 院長

長尾 和宏氏

溝脇 尚志氏
みぞわき・たかし 1989年に京都大学医学部卒業。97年に同大学大学院医学研究科を修了。99年に京都大学附属病院放射線治療科助手に。2016年から現職。関連各科と連携したユニット外来を実践し、患者・家族への最良の医療提供に尽力している。

ながお・かずひろ 東京医科大学卒業後、大阪大学第二内科入局。1985年、兵庫県尼崎市で「長尾クリニック」を開業。外来診療のほか在宅医療を実践する。著書に「薬のやめどき」など。「痛くない死に方」は映画化され、2021年春に公開された。

身近にかかりつけ医を 放射線治療が高精度に

診療科の枠を超え ユニット外来
町永 がん医療はほとんど治療がある。でも副作用が起ることも多くなり、いびつな形のがん細胞もびびり合わせて照射することが可能です。ただ、専門医が少ないという課題があり、後進の育成に努めています。
町永 京都大学病院の新たな取り組み、ユニット外来とは、満腹、同じ外来で関連する複数の診療科の医師が1人の患者を診察し、治療を進めていきます。すい臓がん、例えば前立腺がんなら放射線治療科、泌尿器科がユニットを組んで対応します。患者側はストップで各専門医の話を聞け、医療者側も複数人で診療にあたるとして、より良い治療をめざします。生稲 いまはいろいろな角度からみても、がん治療は安心ですね。

副作用のつらさをケア
町永 抗がん剤の副作用には、吐き気、下痢、食欲不振、手足のしびれ、口内炎、吐き気、手足のしびれなど、影響は全身に及びます。生稲 ホルモン治療の副作用も、抗がん剤のやめどき、自分ならどうする？
で倦怠感、うつ症状に苦しみました。ホットフラッシュといわれるほてりの症状は、周囲に気づかれず、平穏を装うのにも体力を消耗しました。町永 副作用を軽減するサポートも、抗がん剤のやめどき、自分ならどうする？

フォーラム内で流れたVTR

●9年前胃がんに 再発後も仕事続ける

梅田史世さんは9年前、70歳の時にステージ4のがんを罹患した。初回の抗がん剤治療で、吐き気などの副作用に苦しんだが、分子標的薬の適応があったので抗がん剤治療が継続でき、腫瘍が縮小、手術によって腫瘍は見えなくなる。しかし5年後に肝臓への転移が見つかり、手術、抗がん剤、新しい分子標的薬の治療を受けながら仕事を続けている。

●ユニット外来 最善の治療を探る

京都大学病院のユニット外来。泌尿器科や放射線治療科の医師らがチームを組み、前立腺がんの患者の治療について議論を重ねている。放射線を骨盤全体に当てるか、ピンポイントで当てるか。診療科の枠を超えて、最善の治療を探るこの取り組みに、医療者は手応えを感じている。

●4年前乳がんに 漢方薬で副作用緩和

4年前にステージ4の乳がんを罹患した太田明子さん。抗がん剤でがんは縮小したが、昨年再発。分子標的薬の治療を始めた。効果はあったが、下痢などの副作用で仕事との両立に苦しみ、そんな中漢方薬と出会い、症状が緩和された。

●病室写真家 ベッドから撮影 夢中に

病室写真家・TAKAさんは、病室から見える風景を撮り続けている。きっかけは6年前、多発性骨髄腫になり、絶対安静のベッドの上から美しい朝焼けの写真が撮れたこと。病気がちっぽけなことに加え、今の状態を受け入れて楽しむようになった。カメラが生きがいになった。撮影中は痛みも忘れることができた。



生稲 2001年の人間ドックで見つかりました。早期発見で転移もなかったため、切除する。

町永 放射線治療も経験しています。生稲 照射する位置がずれないように、首のあたりには消えないうまくマージングしています。それが人に見えないか、とを公表してはなかった。当時はがんを公表してはなかった。生稲 先生は、自分の思いを伝えることが大事です。真実に伝えることは、患者さんにとっても人間と人間です。患者さんには、そういうつながりを大事にしながら、治療のそんでほしいと思います。

生きがいが力に
町永 病室写真家・TAKA
生稲 退院して自宅に戻った時、自分が家族に必要とされていることにあらためて気づかされた。感謝の気持ちがわきました。がんは怖い敵ですが、そういう部分がありました。町永 医療に思っています。生稲 先生は、自分の思いを伝えることが大事です。真実に伝えることは、患者さんにとっても人間と人間です。患者さんには、そういうつながりを大事にしながら、治療のそんでほしいと思います。

コーディネーター 福祉ジャーナリスト 町永 俊雄氏
まちなが・としお 1971年にNHK入局。2004年から「福祉ネットワーク」キャスターとして、各地でシンポジウムを開催。現在はフリーで活動。

梅田史世氏
うめた・ふみよ 国立病院の看護部長を52歳でやめ、京都初のがんホスピス設立に参加。57歳で高齢者ケアのNPO法人を設立した。2013年にステージ4の胃がんに。その5年後に再発。現在も治療を受けながら、仕事に情熱を燃やしている。

梅田恵氏
うめた・めぐみ 母・史世さんと同じ看護師の道に進み、がん看護の分野での経験を重ね、がん看護専門看護師になる。その経験や知識を生かし、がんを罹患した史世さんを、治療の選択や療養の進め方などの面でサポートしている。

生稲 がんになって「なるよ」といって「開き直った瞬間がありました。投げやりな考え方も思いましたが、それで前向きになったのも事実。TAKAさんと同じ思いを抱いていました。

生稲 がんになって「なるよ」といって「開き直った瞬間がありました。投げやりな考え方も思いましたが、それで前向きになったのも事実。TAKAさんと同じ思いを抱いていました。

梅田史世氏
うめた・ふみよ 国立病院の看護部長を52歳でやめ、京都初のがんホスピス設立に参加。57歳で高齢者ケアのNPO法人を設立した。2013年にステージ4の胃がんに。その5年後に再発。現在も治療を受けながら、仕事に情熱を燃やしている。

梅田恵氏
うめた・めぐみ 母・史世さんと同じ看護師の道に進み、がん看護の分野での経験を重ね、がん看護専門看護師になる。その経験や知識を生かし、がんを罹患した史世さんを、治療の選択や療養の進め方などの面でサポートしている。

生稲 がんになって「なるよ」といって「開き直った瞬間がありました。投げやりな考え方も思いましたが、それで前向きになったのも事実。TAKAさんと同じ思いを抱いていました。

生稲 がんになって「なるよ」といって「開き直った瞬間がありました。投げやりな考え方も思いましたが、それで前向きになったのも事実。TAKAさんと同じ思いを抱いていました。



京都発 オンラインフォーラム がんと生きる



生稲 晃子氏
いくいな・あきこ 1988年、おニャン子クラブのメンバーとしてデビュー。現在は女優、講演活動などで活躍中。厚生労働省「がん対策推進企業アクション」アドバイザーボードメンバーなども務める。著書に「右胸にありがとう」としてさようなら。

生稲 退院して自宅に戻った時、自分が家族に必要とされていることにあらためて気づかされた。感謝の気持ちがわきました。がんは怖い敵ですが、そういう部分がありました。町永 医療に思っています。生稲 先生は、自分の思いを伝えることが大事です。真実に伝えることは、患者さんにとっても人間と人間です。患者さんには、そういうつながりを大事にしながら、治療のそんでほしいと思います。

生稲 退院して自宅に戻った時、自分が家族に必要とされていることにあらためて気づかされた。感謝の気持ちがわきました。がんは怖い敵ですが、そういう部分がありました。町永 医療に思っています。生稲 先生は、自分の思いを伝えることが大事です。真実に伝えることは、患者さんにとっても人間と人間です。患者さんには、そういうつながりを大事にしながら、治療のそんでほしいと思います。

主催：読売新聞社 NHK厚生文化事業団 NHKエンタープライズ 後援：NHK京都放送局 厚生労働省 京都府 京都市



協賛：ツムラ